

鹿児島県肝付町内之浦方言の音節末摩擦音

高城隆一

taki.ryuichi.0816@gmail.com

キーワード：鹿児島方言 内之浦方言 記述言語学 音韻論 音節末子音

要旨

本稿では、内之浦方言の音節末子音の調査データを提示し、下記の3点を報告する。(i) 内之浦方言の音節末子音には「促音」、「撥音」に加えて、日本語共通語の「摩擦音+狭母音」に対応する「摩擦音」が存在する。(ii) 音節末摩擦音は「促音」、「撥音」と異なり、後続音に同化しない。(iii) 音節末摩擦音は、「母音脱落形(木部 2001)」とされている鹿児島市方言とは異なり、無声硬口蓋摩擦音[c]として実現する。また、スペクトログラム、形態音韻規則、アクセントのそれぞれに関する分析案を検討し、音節末摩擦音が実際に音節末にあることを確認する。

1. はじめに

本稿では、鹿児島県^{きもつき}肝付郡^{きもつきちゆう}肝付町^{うちのうちちゆう}内の旧内之浦町中心部(図1a)で話されている伝統方言(以下、内之浦方言)の、音節末子音に関する調査結果¹を提示する。通時的な分析に重きを置いた藤原(1986: 221-323)による概説を含め、先行研究では内之浦方言の音体系の全体像は明らかにされていない。

日本語共通語とは異なり、内之浦方言の音節末では、「促音/Q/」、「撥音/N/」に加え、「摩擦音/H/」²が出現する。この音節末摩擦音を他の音節末子音(特に促音)と区別する大きな特徴としては、後続子音に同化しないことが挙げられる。さらに、音節末摩擦音が「母音脱落形(木部 2001)」で実現するとされている鹿児島市方言とは異なり、無声硬口蓋摩擦音[c]として実現する³ことを報告する。



図1 肝付町の地図
(地理院地図を基に作成)

¹ 本稿の記述は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(プロジェクトリーダー：木部暢子)及び、JSPS 科研費 17H02332 「比較言語学的方法による日本語・琉球諸言語方言の祖語の再建および系統樹の構築」(研究代表者：五十嵐陽介)の助成を受けて、平成30年8月から平成31年3月にかけて実施した、4回の調査による成果の一部に基づいている。話者はいずれも旧内之浦町中心部出身・在住のH氏(昭和16年生・男性)、N氏(昭和27年生・女性)、Y氏(昭和22年生・女性)の3名である。調査にご協力くださっている話者の方々、並びに話者の方々をご紹介くださった、肝付町教育委員会と肝付町シルバー人材センターの方々記して感謝申し上げます。また、構想段階において本稿に関連するコメントや質問を青井隼人氏、占部由子氏から賜ったことに、併せて感謝申し上げます。

² 語末ではミニマルペアとして、[iʔ]/iQ/《息》、[in]/iN/《犬》、[iç]/iH/《石》などが見つかっている。

³ 主に語末で[c~e]の揺れが見られるが、本稿では[c]で代表させる。

以下、2 節では近隣の鹿児島市方言における音節末音素に関する木部(2001)の分析を紹介する。3 節では、内之浦方言の音節末子音の調査結果を提示する。4 節では音節末摩擦音が実際に音節末にあることを主張する。

2. 近隣の方言における音節末音素の分析(木部 2001)

木部(2001: 43)は、「鹿児島市を中心とする鹿児島の主流方言」(以下、鹿児島市方言)に関して、本稿で扱うものと類似した現象について、通時的な視点から分析をしている。木部(2001)は、鹿児島市方言において、「狭母音音節が語頭以外の位置でことごとく変化すること」を指摘している。さらに、「変化のしかたには規則性があり、当該音節の子音の種類によって」(1)に示すように決まっているという。

(1) 木部(2001)による鹿児島市方言における狭母音音節の変化

- a. 破裂音(ki, ku, gi, gu, tʃi, tsu, dʒi, dzu, bi, bu)の場合は声門閉鎖音。

[kaʔ] (柿), [aʔ] (灰汁), [kuʔ] (釘), [ojoʔ] (泳ぐ), [kuʔ] (口), [kuʔ] (靴), [aʔ] (味), [miʔ] (水), [kuʔ] (首), [toʔ] (飛ぶ)

- b. 鼻音(ni, nu, mi, mu)の場合は撥音。ただし, ni は語彙的に[i] になる⁴。

[tan], [tai] (谷), [in] (犬), [mon] (物), [kan] (紙), [an] (編む)

- c. 弾き音(ri, ru)の場合は[i]。ただし、動詞語尾の ru は声門閉鎖音になることもある⁵。

[mai] (鞠), [çi:] (昼), [aʔ], [ai] (ある)

- d. 摩擦音(fi, su, zi, zu, çi, fu)の場合は母音脱落形⁶。

[kwaʃ] (菓子), [us] (臼), [kwaʃ] (火事) [kas] (数)

(木部 2001: 43)

内之浦方言においても、これに類似した現象が生じたことで、多くの音節末子音が作り出されたと考えられる。

3. 内之浦方言の音節末子音

本節では、内之浦方言の音節末子音について、先行研究の記述と併せて促音(3.1)、撥音(3.2)、摩擦音(3.3)の順で調査結果を提示する。

3.1. 促音

内之浦方言の音節末に現れる促音を含む語を(2)に示す⁷。(2) a~g は語中の例、(2) h は語末の例である。ここには、木部(2001)が「声門閉鎖音」と呼んでいるものが含まれている。木部(2001)

⁴ 木部(2001)が例として挙げている[tan~tai]《谷》の他に、[nan~naj]《何》も存在する。

⁵ 内之浦方言の動詞では、基本的に声門閉鎖音[ʔ]で現れることが分かっている(高城 2019)。^[i]との揺れに関する、環境や動詞ごとの違いについては今後の課題とする。

⁶ 母音脱落に加え、子音の無声化も見られる。

⁷ [音声表記]/音素表記/《日本語共通語訳/グロス》の順で提示し、音節境界を「.」で示す(以下でも同様)。

が挙げている(1)の例は、すべて当該音が語末に現れているもの(本稿の(2) h と対応するもの)である。しかし、語中では、鹿兒島市方言においても内之浦方言においても、直後の音素に同化して声門閉鎖音[ʔ]以外の音で現れるものがあることから、本稿では両者を併せて「促音」と総称する。

- (2) a. [hap`pa] /haQ.pa/ 《葉っぱ》、 [bab`ban] /baQ.baN/ 《おばさん》
 b. [mit`tama] /miQ.ta.mai/ 《水溜り》、 [ot`tean] /oQ.cjaN/ 《お父さん》、
 [ded`don] /deQ.doN/ 《大工さん》
 c. [çik`kagan] /hiQ.ka.gaN/ 《ふくらはぎ》、 [ig`go] /iQ.go/ 《イチゴ》
 d. [dossai] /doQ.sai/ 《どっさり》、 [wazzae] /waQ.za.e/ 《すごく》
 e. [kiecane] /kiQ.sja.ne/ 《汚い》
 f. [kad`ne] /kaQ.ne/ 《垣根》、 [tab`mon] /taQ.moN/ 《薪⁸》
 g. [mu?wara] /muQ.wa.ra/ 《麦わら》、 [mi?oke] /miQ.o.ke/ 《水桶》
 h. [ku?] /kuQ/ 《口》、 [hagu?] /ha.guQ/ 《歯茎》

促音の実現形は直後の音素によって表 1 のように予測できる。

表 1 促音の逆行同化

直後の音素	調音位置の逆行同化	調音様式の逆行同化
阻害音 (a~e) ⁹	あり	あり
鼻音 (f)	あり	なし
その他 (g~h)	なし	なし

すなわち、直後の音素が阻害音(a~e)であるとき、促音は調音位置・調音様式共に逆行同化する。直後の音素が鼻音(f)であるとき、促音は調音位置のみ逆行同化する。直後の音素が阻害音・鼻音以外(接近音・母音)(g)であるとき及び、直後に音素がないとき(語末)(h)、促音は調音位置・調音様式共に逆行同化せず、声門閉鎖音として実現する。

上記の逆行同化は、(3)のように助詞との境界¹⁰にも同様に適用される

- (2) h. (再掲) [ku?] /kuQ/ 《口》、 [hagu?] /ha.guQ/ 《歯茎》
 (3) [kug`ga] /kuQ.ga/ 《口=NOM》、 [haguk`kai] /ha.guQ.kai/ 《歯茎=ABL》

⁸ 直訳すると「焚きもの」。

⁹ 表中のアルファベットは(2)と対応している。

¹⁰ 助詞との境界を「=」で示す(以下でも同様)。

3.2. 撥音

内之浦方言の音節末に現れる撥音を含む語を(4)に示す。これは(1)bに対応している。(4)a-bは語中の例、(4)cは語末の例である。

- (4) a. [jamme] /jaN.me/ 《病気》、[ninni?] /niN.niQ/ 《ニンニク》
 b. [tempura] /teN.pu.ra/ 《天ぷら》、[nanda] /naN.da/ 《涙》 [doŋkobi?] /doN.ko.biQ/ 《カエル》
 c. [min] /miN/ 《耳》、[dekon] /de.koN/ 《大根》

撥音の実現形も表 2 のように予測できる。

表 2 撥音の逆行同化

直後の音素	調音位置の逆行同化	調音様式の逆行同化
鼻音 (a) ¹¹	あり	あり
破裂音 (b)	あり	なし
その他 (c)	なし	なし

すなわち、直後の音素が鼻音(a)であるとき、撥音は調音位置・調音様式共に逆行同化する。直後の音素が破裂音(b)であるとき、撥音は調音位置のみ逆行同化する。直後に音素がないとき(語末)(c)、口蓋垂鼻音として実現する。

3.3. 摩擦音

内之浦方言の音節末に現れる摩擦音を含む語を(5)に示す。これは、鹿児島市方言において、「母音脱落形」で現れるとされている(1)dに対応する。ただし、藤原(1986: 235-236)の記述にもある通り、内之浦方言では、「母音脱落形」ではなく無声硬口蓋摩擦音[ç]が現れる。(5)aは摩擦音が名詞の語中に現れている例、(5)bは名詞の語末に現れている例、(5)cは(5)bの名詞に主格標識を付けた形の例、(5)dは動詞の非過去終止形の語末に摩擦音が現れている例である。

- (5) a. [muçme] /muH.me/ 《娘》、[kuçja?] /kuH.jaQ/ 《串焼き》
 b. [aç] /aH/ 《足》、[karaç] /ka.raH/ 《カラス》、[kaç] /kaH/ 《火事》、[kiç] /kiH/ 《傷》
 c. [açga] /aH.ga/ 《足=NOM》、[karaçga] /ka.raH.ga/ 《カラス=NOM》、
 [kaçga] /kaH.ga/ 《火事=NOM》、[kiçga] /kiH.ga/ 《傷=NOM》
 d. [keç] /keH/ 《消す.NPST》、[kaç] /kaH/ 《貸す.NPST》

なお、(5)に挙げた例は、木部(2001)で示されている「摩擦音([f, s, z, ç, i, φu])」のうち、最

¹¹ 表中のアルファベットは(4)と対応している。

初の4つに対応するもののみである。語頭以外に[çi, ɸu]を含む語に対応する例は、現時点で「ヒヒ(動物)」と「ムヒ(商品名)」の2つが確認できている。このうち「ヒヒ」は、4.2節に示す形態音韻規則により、語末に母音があることが示唆される¹²ことから、(6)のように解釈できる。

(6) [çiçi] /hi.hi/ 《ヒヒ》

また、「ムヒ」については、話者から「『虫』の発音と『ムヒ』の発音は違う」という指摘がなされたことを踏まえ、(7)のように解釈している。

(7) [muç] /muH/ 《虫》、[muçi] /mu.hi/ 《ムヒ》

語中の例や、[ɸu]に対応する例も含めて、さらに調査する必要がある。

促音や撥音とは異なり、摩擦音では同化現象は見られない。この同化現象の有無が、摩擦音と他の音節末子音(特に促音)を区別する大きな特徴である。上記の通り、[çi, ɸu]に対応する音節末摩擦音の例は未見であることから、現時点では、これらに対応する音節末摩擦音は存在しないと仮定する。この仮定が正しい場合、摩擦音に同化が見られないことについて、(8)のような説明を与えることが可能となる。

(8) 木部(2001)が鹿兒島市方言について指摘しているものと同様の、狭母音の無声化と脱落を経て残った歯擦音が、狭めが弱まって[ç]となった。これにより、調音位置が失われ歯擦音におけるような狭窄も失われた。促音や撥音の場合の声門閉鎖音[ʔ]や口蓋垂鼻音[N]¹³はそれぞれ閉鎖があるために後続子音の調音位置に同化するが、閉鎖のない摩擦音は、調音位置について後続子音の影響を受けなくなることから同化しない。

(2) d の《どっさり、すごく》などは子音連続の1つ目の子音が促音/Q/として実現しているが、「貸し竿」や「腰ひも」のような/s, z, h/による連続があるときに、1つ目の子音が促音/Q/で実現するのか、それとも摩擦音/H/で実現するのかについては、今後の課題とする。

3.3.1. 先行研究の記述との比較

藤原(1986)は、内之浦方言(及びこれを含む薩隅方言)で観察された「特色」に対して、通時的な音変化の説明を与えている¹⁴。(9)は、音節末摩擦音に関連する項目を抜き出したものである。

¹² 音節末が子音であれば、属格標識を付けると*[çiçno]となることが予測されるが(4.2節で詳述)、実際の発話では[çiçin] /hi.hiN/ 《ヒヒ=GEN》であった。

¹³ (2) c の[ig'go] /iQ.go/ 《イチゴ》や(4) b の[nanda] /naN.da/ 《涙》などに見られる子音連続は、同化によるものではなく、基底形で指定されているものと考えられる。

¹⁴ 昭和28年1月の調査結果に基づいている。

(9) 藤原(1986)による[ç]に関する項目

語音上の音節での子音交替

[ɸ] > [ç]

「むかし」 > 「ムカヒ」¹⁵、「さしもの屋」 > 「サヒモンヤ」、「かごしま」 > 「カゴヒメ」¹⁶。「知らん」が「ヒタン」¹⁷ともある。「ソゲンチャヒタ」¹⁸での「ヒ」は「シ」からのものである。

この子音交替での「ヒ」¹⁹は、他地方人の耳にはつきやすいものであろう。「ス」 > 「ヒ」のばあいともなると、なおさらである。

[s] > [ç] ーただし、これは、音節交替²⁰のばあいである。

「むすめ」 > 「ムヒメ」、「ガラス窓」 > 「ガラヒマド」、「あすの晩」 > 「アヒノバン」。「何々しヤヒナ。」(何々しなさんな。)の「ヒ」も、「ス」からのものである。

[ʒ] > [ç]

「ひつじ」 > 「ヒツヒ」。

藤原(1986: 235-236)

藤原(1986)は「音声表記のたてまえのもの」と注意書きを付して、大部分をカタカナで書いており、母音の有無や無声化の有無についての音声実態は読み取れない。しかしながら、(9)が「子音交替」の例として挙げられていることを考慮すると、本稿が「摩擦音」としているものを、藤原(1986)は「子音+(無声)母音」と分析していると考えられる。

次節では、[ç]が音節末にあるとする本稿の分析が、少なくとも筆者が観察したデータにおいては妥当であることを示す。

3.4.3 節までのまとめ

本節では、内之浦方言の音節末子音について、先行研究の記述と併せて促音(3.1)、撥音(3.2)、摩擦音(3.3)の順で調査結果を提示した。

このうち、促音と撥音については、鹿児島市方言と近似していることが分かった。一方、音節末摩擦音が「母音脱落形」つまり摩擦音単独で現れるという鹿児島市方言に対し、内之浦方言では音節末において摩擦音が対立せず、一様に無声硬口蓋摩擦音[ç]で現れることを指摘した。

¹⁵ 藤原(1986)には「その事例のアクセントの高音部をあらわす」ための上付き線があるが、引用の際には省略した。以下でも同様。

¹⁶ 「鹿児島へ／に」の意か。筆者の調査データでは[kagoçma]である。

¹⁷ 藤原(1986)では、音節頭と(本稿における)音節末が区別されていない。

¹⁸ 「そうでした／その通りでした」の意。

¹⁹ 母音の無声化した[ç]の意か。ただし語例の表記には使用されていない。

²⁰ 子音音素のみ・母音音素のみがそれぞれ「交替」している「子音交替」・「母音交替」と並んで用いられている用語である。「交替」後の音節に、対応する「交替」前の音節の子音音素と母音音素が両方とも含まれないものがこれに当てはまるようである。ここでは [su] > [çi] という「交替」が起きたと解釈していると考えられる。

4. 音節末摩擦音について

音節末摩擦音は、2節で挙げた鹿児島市方言の他にも、黒木(2016)による鹿児島県北薩方言²¹に関する記述や、中村(2019)による長崎県五島宇久島野方方言(以下、野方方言)に関する記述でも確認できる。

中村(2019)は、野方方言に当該音を認めることを支持するものとして、スペクトログラムによる音響分析と、形態音韻規則による分析の結果を挙げている。以下では、中村(2019)による野方方言の分析方法が、内之浦方言でも有効であることを示した上で、これを補強するものとしてアクセントによる分析案を提示する。

4.1. スペクトログラムによる分析

3.3節の(5)に示した語例のうち、《娘、串焼き、火事、傷》のスペクトログラム²²を図2～図5に示す。なお、縦軸の周波数はすべて0Hzから5000Hzである。

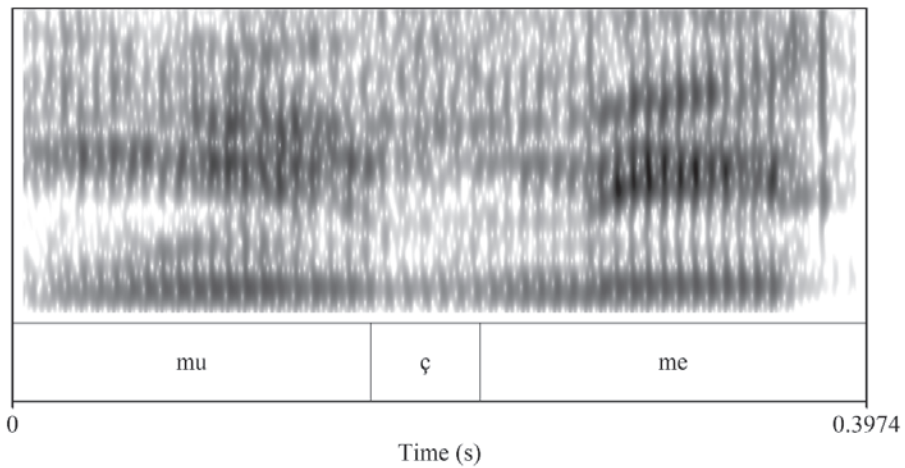


図2 《娘》のスペクトログラム

²¹ 「日本語の一変種たる鹿児島県旧川内市、旧串木野市、旧市来町の伝統方言」の総称として用いられている。

²² Ptaat によって得られた画像を使用している。

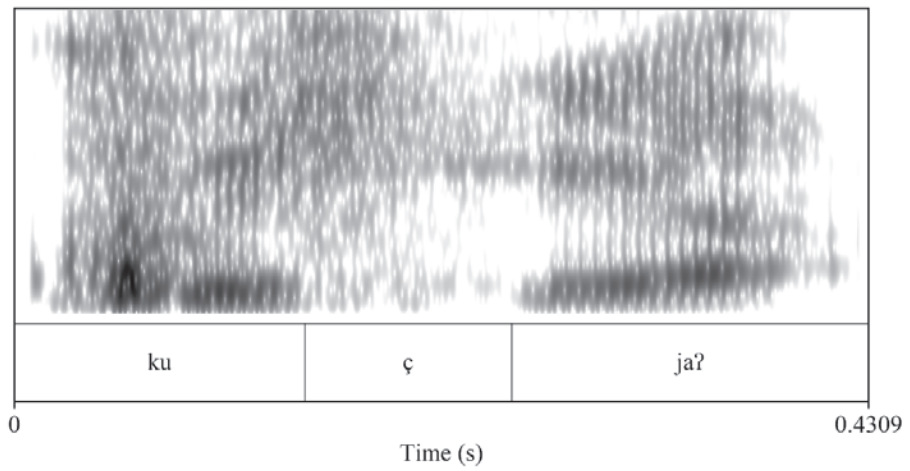


図 3 《串焼き》のスペクトログラム

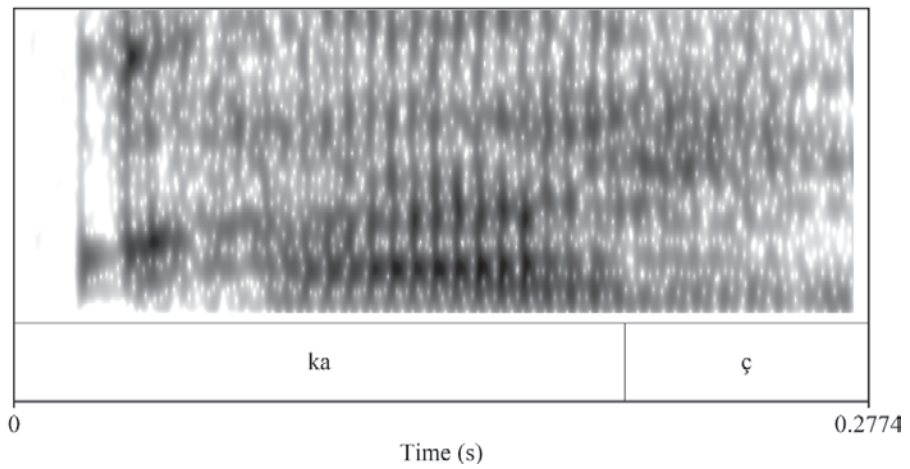


図 4 《火事》のスペクトログラム

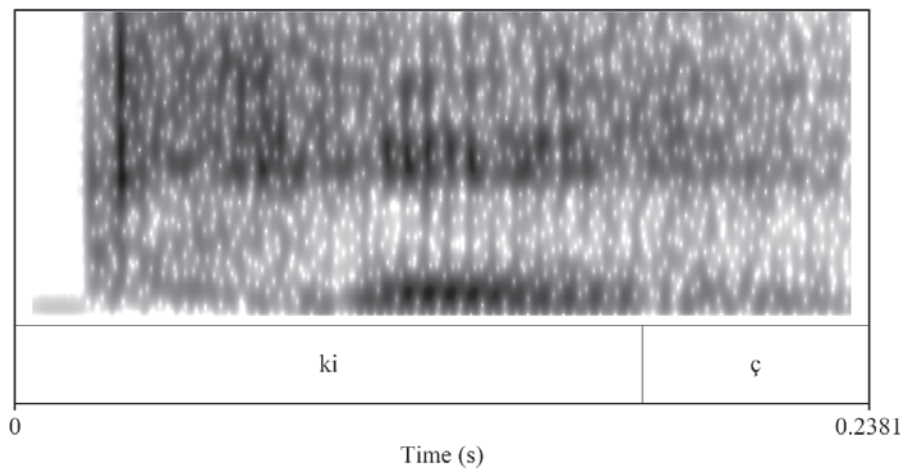


図 5 《傷》のスペクトログラム

図 2～図 5 において、[ç]と転写している箇所にはボイスバーが見られないことから、声帯振動のない無声音であることが確認できる。また、当該箇所を観察すると、エネルギーの集中している周波数帯が 2000Hz から 3000Hz と一定であることが確認できることにより、図 2～図 5 で転写されている全ての [ç] が同質であることと、いずれの語においても母音が後続していないことが示唆される。

4.2. 形態音韻規則による分析

内之浦方言では属格標識として =n と =no の 2 種類の異形態が存在する。=n が (10) のように母音に接続するのに対し、=no は (11) のように子音に接続する。

(10)a. [jabo] /ja.bo/ 《藪》

b. [jabon] /ja.boN/ 《藪=GEN》

(11)a. [hon] /hoN/ 《本》

b. [honno] /hoN.no/ 《本=GEN》 *[honn]

(11)において仮に=n を接続させると、[honn]となる。頭子音だけの音節 /hoN.n/ や尾子音の連続 /hoNN/ は音節構造上許されないことから、中村(2019)における野方方言と同様²³に、音節構造を満足させるために異形態である=no が現れる。中村(2019: 16)は野方方言に「音節構造を満足させるように、=n の直後に-o を付与せよ。」という形態音韻規則を立てており、これは内之浦方言にも適用できる。

当該音が語末にある《傷》に属格標識を付けると、(12)のようになる。

(12)[kiçno] /kiH.no/ 《傷=GEN》 *[kiçn]

このように、属格形が*[kiçn]ではなく[kično]であることは、《傷》の単独形が語末に母音を伴わない[kič]であることを示唆している。

4.3. アクセントによる分析

中村(2019)の観察は野方方言の名詞の語末に限定されており、その限りにおいては上記の分析のみでも一通りの説明ができています。一方、本稿が扱っている内之浦方言の現象には名詞の語中や動詞の例も含まれており、上記の分析だけでは説明できない。そこで本稿では、新たにアクセントによる分析を提示する²⁴。

²³ 但し、野方方言における=n/=no は主格標識である。

²⁴ 内之浦方言のアクセント体系については、平山(1951)などが一型アクセントであると述べている。しかし、筆者の調査では、同じ語のアクセント実現に発話ごとの揺れが観察され、平山(1951)らの記述を積極的に支持する根拠は見つかっていない。但し、本稿ではこの問題の詳細には立ち入らない。

内之浦方言のアクセントは、モーラ単位ではなく音節単位で付与される(上村 1969: 239)。この分析が正しいと仮定すると、ある語(句)のアクセントを観察することで、音節境界を確認できる場合があることになる。当該音が語中に現れている《娘》を例にとり、単独形のアクセントを(13)に示す²⁵。

(13) muç[me] ~ muç[me]

当該音が音節末にない場合、(14)のような発音が予測される。

(14) *mu[çi]me ~ *muçi[me]

実際に共通語形で発音してもらうと、(15)のような発音が聞かれる。

(15) mu[su]me ~ musu[me]

上記の分析結果は、先の2つの分析結果と併せて、当該音が音節末にあることを強く示唆するものである。

5. 結論

本稿では、内之浦方言の音節末子音に関する調査データを提示し、「促音/Q」、「撥音/N」に加え、「摩擦音/H」が出現することを報告した。特に、先行研究では明確に指摘されていない、摩擦音が末子音となっていることを確認した。

また、摩擦音が「母音脱落形(木部 2001)」つまり摩擦音単独で現れるという鹿児島市方言に対し、内之浦方言では音節末において摩擦音が対立せず、一様に無声硬口蓋摩擦音[ç]で現れること、摩擦音を他の音節末子音(特に促音)と区別する大きな特徴として、後続子音に同化しないことを指摘した。さらに、中村(2019)が、野方方言に当該音を認めることを支持するものとして提示した、スペクトログラムと形態音韻規則を用いた分析方法を内之浦方言にも適用した上で、これらを補強するものとしてアクセントによる分析を新たに提案した。

略語一覧

ABL: 奪格 GEN: 属格 NOM: 主格 NPST: 非過去終止

参考文献

上村孝二 (1969) 「アクセント」九州方言学会 (編) 『九州方言の基礎的研究』 238-239. 東京 :

²⁵ (13)~(15)では音調の上昇位置を「[]」、下降位置を「] 」で表している。

風間書房.

- 木部暢子 (2001) 「鹿児島市方言に見られる音変化について」『音声研究』5(3): 42-48.
- 黒木邦彦 (2016) 「北薩方言の複合不完全相と抱合不完全相」『Technical and applied linguistics at Kobe Shoin』19: 29-41.
- 高城隆一 (2019) 「鹿児島県肝付町内之浦方言の動詞について」国立国語研究所 共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」平成30年度第2回研究発表会「動詞・形容詞(本土諸方言)」. 国立国語研究所. 平成31年3月10日.
- 中村京介 (2019) 「長崎県五島宇久島野方方言における無声摩擦音の解釈: 音節末に/s/をみとめる音素配列規則の提案」『思言』14: 13-25.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究: 共通語・京阪語との比較考察』東京: 学界の指針社.
- 藤原与一 (1986) 『九州東部域三要地方言: 大分県朝来方言・宮崎県村所方言・鹿児島県内之浦方言』東京: 三弥井書店.

国土地理院「地理院地図(電子国土 Web)」

<https://maps.gsi.go.jp/#9/31.618305/130.624695/&base=blank&ls=blank&disp=1&lcd=blank&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0f1>[平成31年3月アクセス].

The Syllable-Final Fricatives in the Uchinoura Dialect of Kagoshima Japanese

TAKI Ryuichi

Keywords: Kagoshima Japanese, Uchinoura dialect, descriptive linguistics, phonology, syllable-final consonants

Abstract

In this paper, I report that the Uchinoura dialect, which is spoken in the Osumi Peninsula of Kagoshima prefecture, has three types of syllable-final consonants; an unassimilating voiceless palatal fricative, in addition to the geminated obstruents and nasals. Different from the central Kagoshima Japanese, a syllable-final fricative surfaces as palatal fricative [ç] in the Uchinoura dialect. Through acoustic, morpho-phonological and accentual analyses, it is confirmed that the palatal fricatives are better interpreted as syllable codas.

(たき・りゅういち 東京大学大学院)